



鳥取県において民具調査を始めて

櫻村 賢二（鳥取県総務部総務課県史編さん室 学芸員 / 2005・2006年度COE研究員・PD） KASHIMURA Kenji

非文字資料の一つに民具がある。その民具に6年近く触れたり、調査したりする機会がなく、民具について考えることがあまりなかった。しかし、平成19年2月より鳥取県史編さん室（平成18年4月設置）に民俗担当として着任し、鳥取県内の博物館、資料館の収蔵する民具を見て回る機会を得た。『新鳥取県史』では急速に失いつつある民俗と同様に民具を重要視しており、「民俗編」とは別に独立した1冊として「民具編」の刊行を目指している。県史編さん事業で「民具編」を編さんするという事例を知らないため、どのようなものにするか構想に悩むところであるが、構想しようにも鳥取県内の博物館、資料館等が民具・民俗資料をどのようなものをどのくらい所蔵しているのか、全く分からないというのが現状であった。まず市町村の教育委員会に電話で問い合わせを行ったが、民俗資料について目録や台帳が作成されていることが稀であり、所蔵資料について大まかにも把握できるような現状にないことがわかった。

とりあえず鳥取県内の資料館を見て歩き、担当者からの聞き取り調査を開始した。これまで約20の資料館等を調査し、調査の過程において、博物館や資料館以外の場所、例えば多くの小学校等にも民具が集められていることも判明した。はっきりと資料館とは銘打っていないにしても、民具を残したいがために小学校や公民館、倉庫などに保管している市町村がほとんどであるが、保管しているだけで今後の活用や資料の公開までは及んでいないというのが実状である。とりあえずは消失を恐れ、保存されている民具の総数は相当なものとなるだろう。また、これらの民具は収集保存に携わった人、寄贈者が不明であることが多くモノはあるがデータがないことが多い。民具の使用方法は文献や古老からの聞き取りである程度は判明するが、いつ誰が製作し、誰が使用したか、どこで使用したかほとんどわからない。民具資料は製作者や使用者からの情報を得られない現状からすれば、モノ自体から情報を引き出す必要が高まっており、そうした意味で地中から掘り出されたものではないにしても考古資料に近づきつつある。

しかし諦めるのはまだ早く、民具を傍らに古老が語ればある程度の情報を聞き出すことも可能である。鳥取県という限定された地域ではあるが、この県史編さん事業を通じて、民具に添えて少しでも多くの古老の言葉を資料として後世に残すことを目指している。しかし、すでに直接の製作者、使用者が存命であることが少ないのも事実である。そのためにもどのように使用するかを知るために有効な写真、映像資料など

の非文字資料、そして文字資料も併せて収集していこうと考えている。すでに失われた技術を知るにはモノ自体に情報を求めると同時に、様々な非文字資料と文字資料を重ねなくてはならないのが現在の民具研究である。

悲観的な状況を述べたが、今までの調査においては新しい出会いがあった。果樹生産とその生産用具との出会いである。鳥取県には鳥取二十世紀梨記念館という梨をテーマとした展示施設があり、梨に関する歴史や産業の情報を紹介している。鳥取県は梨、特に二十世紀梨の一大産地であり、養蚕経営が厳しくなって以降、それに取って代わって大きな収入源として農家を支えてきた重要な産業である。その生産用具は多くが梨生産以前からの農具を活用し、改良しており、梨以前、以後は分断されるものではない。また園芸技術の改良や共有のために記録写真が大量に残されており、これも合わせればさらに貴重な資料群となる。しかし明治37（1904）年に鳥取県に二十世紀梨が初めて入り、すでに100年以上が経過しているにもかかわらず、現在進行中の産業の資料、特に民具にはあまり注目が集まらない。養蚕のように一度盛隆を極めて衰退して初めて注目が集まり、資料保存とかつての姿の調査が始まるという悪循環が繰り返される可能性がある。現在進行中の産業の記録を今から収集し、人々の生活を記録化することは重要である。時代が進み希少化することや研究成果が上がるのを待っては遅い。実験的な試みになるが近代以降、現代の民具を発見し、それを後世に伝えるべき資料とすることに挑みたい。



鳥取二十世紀梨記念館の展示品